

経営と健康

第8回

栄光と悲劇の偉人「西郷隆盛」

講談師 一龍斎貞花

鹿児島では「せごどんの遠行」とい

うイベントが、毎年九月初分の日にゆかりの所を歩いて回り、南洲墓地でおにぎりを食べ、岩崎谷の洞窟で解散。毎回二千人近い参加者、全日電材連事務局の伊達さんも鹿児島出身で、このイベントに何度も参加されたそうです。郷土の歴史を若者たちに伝えていくことは、郷土愛を育む素晴らしいことと申せましょう。

「もう三月も十日を過ぎ、総攻撃の日が目前に迫り、官軍は品川まで来て陣をしいている。山岡が話をまとめたとはいえ、俺が西郷と会うより仕方がなからう」

幕府の陸軍総裁勝海舟は、芝三田の薩摩屋敷へと乗り込んだ。パンパン

「西郷さん、貴方が総大将で来ると

いうので私は安心してましたよ。貴方なら江戸百万市民を泣かせるようなことはしないと思っていましたから」

「ここまで軍を進めては来たが、これ以上どうしようか。あんたと相談しなくっちゃ。おいどんの一存ではいかんのでござす。勝さん、和宮様と天璋院様はどうなさっておられるのか、それが心配で」

「私も心配で、昨日大奥へ伺ったところ、西郷がもし江戸を攻める時には、自ら命を絶つと仰せ、二人共固い決意でおられました」

「そげんことを」

「西郷さん、江戸を攻めても決して官軍の得にはなりませんまい」

「判つちよる。判つちよるがおいどんの思うようにならんでござす」

「徳川旗本八万騎で和宮様と天璋院様は必ず守ります。勝のこの身に代え

ても」

和宮は官軍の頂々朝廷の出身、孝明天皇の腹違いの妹、公武合体の犠牲者として十四代家茂に降嫁された悲劇の女性。天璋院は、薩摩藩主島津斉彬の養女で十三代家定に嫁いだ人。

海舟がその気になれば、この二人を人質にして官軍と交渉することだって出来る。しかしそんな卑怯な真似は、江戸っ子の意地にかけて出来ません。またそんなことをする海舟ではありませんでした。

翌る三月十四日、海舟はひそかに西郷を愛宕山に案内し、眼下に広がる江戸の町並みを見せながら、

「西郷さん、この美しい江戸の町を火の海にしたいと思いませんか。百万の江戸市民を泣かせる人でないと、信じていますよ」

「勝さん、どんなことがあっても、焼かないと約束します」

町並みの向こうに広がる江戸湾が、太陽の光にキラキラと光っていました。黙ったまま、じつと穏やかな海を眺める二人でした。

参謀板垣退助の「あくまでも攻撃を」という主張をはねのけて、西郷は江戸城総攻め取りやめを認めさせたのでございました。

明治六年、不審火によって西の丸から出火、江戸城本丸が消失するや、「おいどんの給料から、復興の献金を」

と、給料の半分、七月分から二百円、八月分から二百五十円献金しています。

西郷の死から二年後、海舟は西郷の死を悼む記念碑をひそかに建立。二人の絆を伝えるこの記念碑が東京大田区

洗足池の海舟の墓近くに建てられています。

江戸城無血開城

慶応四年四月十一日、三百年間天下に号令を発した江戸城は、無血明け渡されたのでございました。

明くる四月十二日、江戸幕府最後の將軍徳川慶喜は、木綿の着物、木綿の羽織、袴姿で寛永寺大慈院から、故郷水戸をさして落ちていったのでございます。慶喜歳わずか三十二歳の若さ。

この時西郷四十二歳、勝四十六歳。

かくして百五十年前、日本は明治維新という新しい時代へスタートしたのでございました。

昭和二十年、アメリカは原爆投下を早くから決めていたとはいえ、ポツダム宣言を早く受け入れていたならば、原爆投下も、東京大空襲もなかったのではと思えば、決断の遅さ、西郷・勝のいなかった国民の不幸とも言えます。

西郷と勝、この二人の絆があったればこそ、江戸の町は救われたといっても過言ではないでしょう。

東京の恩人として、東京都が命日に墓前祭を行っているのは勝海舟と松平定信（浅間山噴火による飢饉・貧民対策として、七分積金は幕末の安政江戸地震の復興の資金にもなった）の二人だけ。

東日本大震災から七年半が経過しながら、今も避難所暮らしや、生活苦から災害援護資金を約半数の人が返済できないでいるという。定信や、保科正之のような政治家はいませんか。

西郷隆盛、勝海舟、そして山岡鉄舟の働きによって、江戸城は無血明け渡され、江戸の町は焼かれずにすんだのでございました。パンパン

西欧使節団出発 留守役西郷

「私達は、岩倉団長の下（もと）、欧米視察に行きます。難しい留守を西郷さんにお願ひします」

「承知した。留守をしつかり守りましょう」

「ついでには、新しい国造りを進めてきました。ここまで進めて来たものを新しく何かしようとする、担当して

いる役人はもとより国民も疑心暗鬼に陥らないとも限りません。そこでお願いですが、新しい政策は一年後私達が帰ってから推し進めるとして、どうか今の政策をお願いします」

「分り申した」

思い立つたらやり遂げる西郷の実力を心配した大久保利通は、留守内閣が西郷の思いのままになるのを恐れ、新しい政策をしないという誓約書を書き、明治四年十一月、岩倉具視団長の

もと、木戸孝允、大久保利通、伊東博文ら欧米使節団は横浜を起航。この時、津田梅子、後に大山巖の妻となる捨松ら五人の子女がアメリカへ留学。

西郷は、最後まで抵抗した榎本武揚の実力を見抜き、罪を許し北海道開拓使に任命。

「廢藩置県に反対、旧体制を守れ」と、島津久光から詰問十四ヶ条が送られるや、事を荒立てないよう久光に詫状を

提出。後には自分が旧士族を守れと辞任します。

明治天皇の行幸に従い鹿児島まで同行。そしてこれまでの正三位参議に続いて陸軍元帥、近衛都督に就任し、名実ともに明治維新第一人者の地位を得たのでございます。

明治六年、政府が朝鮮に送った国書が、今迄の書式や徳川將軍の印鑑と違ふと突き返されてしまった。

朝鮮は、徳川以上の鎖国政策で日本の明治政府を認めていなかった。

これが「無礼だ。朝鮮討つべし」という征韓論の一つです。

「おいどんを使者にしてくれ。殺されれば朝鮮を攻める理由が出来、不平を持つ旧士族を活用出来る」

しかし、西欧使節した者達と意見の相違から、遂には西南戦争に至る西郷と大久保の対立。次回最終回をお楽しみに。パンパン

